

広島大学

I. 実施報告

(1) 実施責任者報告

広島大学学生部 三好 信浩

1. 放送公開講座の大学における位置づけと放送局その他の関係機関との協力関係について

- 大学は社会一般に対して閉鎖的・独善的になりやすい傾向がある。放送を通じ大学レベルの教育を広汎な地域の視聴者に公開することは、開かれた大学としての使命と考える。
本学では昭和51年から放送による公開講座を行っている。その企画立案を行うため、学長を委員長とし、各学部から選出された委員で組織する広島大学放送教育実施委員会に若干名の実施委員からなる専門委員会を設け、実施の細目等の検討を行うこととしている。
- 企画、テーマ設定等の段階から、放送局の制作担当者をオブザーバーとして意見交換の機会を設け、常に、連携を取り、相互協力を計っている。また、講座終了後、当年度の反省及び次年度の計画について制作担当者を含めた会議を設ける。
- 県内の教育委員会、市町村の広報担当課に受講案内及びポスターの配布・掲示等を依頼して、受講生募集の協力を得ている。

2. テーマの選定とそのねらいについて

- テレビ科目「生きものとの付き合い」

最近「地球環境の時代」や「共生の時代」ということがよく言われる。その地球環境問題の中で、自然保護がかなり大きく捉えられているが、その対象になるのは絶滅に瀕している希な種や貴重な種のように、一般市民の生活とは縁が薄い生きもののような印象を与えられている。しかし、環境保全や自然保護の正しい理解は身近な生きものの正しい知識を通してのみ得られることを、このテーマ「生きものとの付き合いーわれわれをとりまく自然ー」によって周知させることを試みた。

この講座では身近にみられる自然環境のうち、とくに“ありふれた”生きものたち（生物群集：植物、動物、微生物）の生活、それも個体のそれよりも生態系の中での個体群や生物群集としての生活を対象にして、天然の自然から人工的な環境にわたる生態系の構造と、その中で果たす機能を解説した。その知識に基づいて自然保護から自然管理まで、これまでわれわれとの付き合いの結果生じた自然または人為的景観と、これからどのように付き合いゆけば良いかを考察できるよう工夫した。

- ラジオ科目「あえて「育む」ー今、子どもの教育に求められていることー」

現在の豊かさや合理化は、子どもの生活環境から教育力を奪った。ひと昔前ならひとりでに育まれていたものがひとりでには育まれなくなった。その延長線上に深刻な問題行動

が多発している。だからといって、親や教師が全面に出すぎると、過保護や過干渉や過支配で子どもをつぶしかねない。「育む」は、「育てる」や「教育」とどう違うのだろうか。子どもを取り巻く生活状況を反省し、「育む」の意味を明確にして、今日の子どもたちに対して「あえて育む」という営みを強化することの必要性を強調するためにこのテーマを選定した。

この講座では、なぜ「育む」なのかの問題を提起し、思春期の今日的な問題行動を手がかりにして思春期以前的人格形成上の問題点を反省し、今日の子どもたちに対してあえて育みたいものを示唆した。そして、問題行動は、思春期の1人立ちと1人歩きを支える基礎的な生活力が育まれていないことを示し、個人的・社会的生活を組みたてる力、人間関係の絆を結ぶ力、寂しさ・つらさへの耐性、思いやり、みずみずしい感性などの基礎的な生活力を育むことの必要性和、育む上での留意点について解説した。また、「育む」ことについて、優れた成果をあげている実践家にその実践の一端を述べていただき、その実践に秘められている知恵と工夫を読みとり、私たちの子育て・教育に採用すべきものを学びとるよう試みたうえで、「あえて育む」という営みを遂行する上での留意点を提案した。

3. 番組、印刷教材、学習指導の関連づけについて

テレビ講座の場合、教材のテキストは153頁の冊子として発行した。その発行数は受講者数にに応じているため、実際に配布されたものは300に満たない。しかし、放送の視聴者数ははるかに多いと思われるから、講義の内容は必ずしも細部にわたってまでテキストには従わなかった。それよりも放送では具体的な素材の映像をできるだけ活用して理解を深めるように努めた。もちろんテキストを読んでいれば放送内容はより正しく理解できるだろう。講義にはそれぞれの講師の専門分野の研究資料を材料にし、研究の場の映像を利用して理解を助けた。またVTRの一部の映像は講師自らが撮影したものを用いた。スクーリングには、毎回4名の講師が出席し、質疑応答により自然保護から自然管理までの意識啓発を努めた。

ラジオ講座の場合、1回30分、18回という放送であったため、講座テーマの一貫性を保持することが難しく、また、放送回数の増加で、受講生が全回通して聞くことは期待でき難いので、テキストは5部18章編成としてテーマ設定の主旨とそのねらいを最初に述べ、スクーリングにおいては、質疑応答を通して講座のねらいが十分理解できるよう努めた。

4. 番組の学習効果について（講師の印象、受講生の反応等から）

○ テレビ講座

スクーリングは、受講者が放送を視聴し、テキストを読んでいることを前提にして行うことが望ましい。しかし、質問内容は1回目のスクーリングでは視聴前で、しかもテキストが配布された直後であったためか、講座の内容とはずれたものが多かった。2・3回目は大体講座の内容に絞られた。

終了後のアンケート調査の結果（女性26、男性38、合計64名）をみると、講義の視聴率は受講者の86%であったが、その2/5が録画ビデオを利用していた。スクーリングでの質疑を通して得られた印象では、生きものに関してかなり広域からの視点をもつようにな

るという点で、かなりの受講効果が見られた。

○ ラジオ講座

スクーリングにおいて、「育む」ことの具体的な内容の質疑が多く出たとともに、終了後のアンケート調査の結果、ほとんどの受講生が、「育てる」という言葉と「育む」という言葉の違いを理解し、子どもの問題行動について、問題の内容・性質・原因やその指導の仕方などをかなり理解していたという点で、相当の学習効果が上がったものと確信する。

5. 印刷教材の作成過程について

○ テレビ科目

- ① 「広島大学公開講座テキスト作成要領」に従って、各講師がそれぞれ原稿を作成する。
- ② テキスト作成会議を開催し、編集を行う。
- ③ 講座責任者が原稿をまとめ、全体調整を行い、学生部教務課へ提出する。
- ④ 印刷原稿の校正に関しては、各講師すなわち執筆者の責任において三校まで行う。

○ ラジオ科目

テレビ科目の①～④と同様である。

6. 学生指導の実施状況について

両講座とも、広島地区で3回、福山地区で2回、延5回のスクーリングを実施した。

今年度は、スライドを用いたり、実物標本を展示するなど、放送された内容を補足するスクーリングを行うとともに、講座に関連する諸問題について広範囲にわたり質疑応答を行った。実施日等については、次のとおりである。

7. 「大学教育の地域社会への開放」に果たす役割について

放送公開講座は、大学における学問・研究の成果を地域社会へ開放し、社会人に対する生涯教育を推進するため、放送というメディアを使って情報提供するものである。

誰でも自由に視聴でき、特定の地域にかたよらず広汎な地域に提供できる。また、担当講師とのスクーリングをはじめ、講義終了後も受講生との人間的な結びつきによって、教育効果が高まっていると確信する。

放送公開講座のテープの二次利用については、受講者等の希望により、今後、より一層地域社会へ開放することを目指して検討を重ねて行く必要があると思う。

8. 「大学の授業への活用」の状況と今後の可能性について

○ テレビ科目

放送された内容は自然な環境での映像が豊富に収録されているので、ビデオに録画された放送内容は大学での講義の教材として一般教育のレベルだけでなく専門課程でも大いに活用できると思われる。とくに自然環境に関する生物学や生態学の分野では、生きものの生活はきわめて多様であるため、各教官がそれぞれ教材を収集できる対象生物やそれらの生息地域には限りがあるから、この放送録画の利用は講義の内容を豊富にするなど、きわ

めて効果的であろう。

○ ラジオ科目

今、子どもの教育においては、「あえて育む」という営みが強く求められている。大人は、親として、教師として、地域社会人として、子どもの成長に対する責任を自覚する必要がある、次代を担う大学生に対して、豊かな人間性を涵養するために、大いに大学の授業へ活用できると思われる。

9. 実施上の問題点と今後の課題等について

○ テレビ科目

1. 講座の周知方法について

アンケートの調査結果によると、受講生は、ダイレクトメール的な新聞、広報、パンフレット等で開設の情報を入手したものがほとんどであった。放送利用による公開講座であるならば、テレビやラジオでの情報伝達をもっと多くする宣伝方法を考えるべきである。

2. 講座の利用効率について

- (1) テレビによる公開講座は土曜日の早朝5:45に放映され、ビデオの時代とはいえ、視聴しにくい時間帯である。それは終了後のアンケート調査の結果（ビデオの利用率41%）にも現われている。
- (2) 映像は再放送されることがなく、スクーリングの会場でも参加者から要望があった。
- (3) 放映後は、限られたところに納められ、再利用されることが少ない。

このように、テレビの制作にかけられた労力に比べて視聴効率が悪いように思われる。放送ビデオが大学に限らず、市町村の公民館などで利用されやすいような方策を考えるべきだろう。

○ ラジオ科目

1. 1回30分、18回という放送であったため、講座テーマの一貫性を保持することが難しかった。
2. 放送回数の増加により、受講生も、全回を通して聞くことの困難さが増した。
3. 30分講座を実施していくためには、30分番組に合うテーマの設定、18回の講座を9回2講座に分割する講座の構成、などの試みを始める時期であると思える。

(2) 科目担当主任講師の所見

(テレビ科目) 生きものの付き合い—われわれをとりまく自然—

主任講師：総合科学部教授 高橋 史樹

最近「地球環境の時代」や「共生の時代」ということがよく言われる。その中で、自然保護がかなり大きく捉えられているが、その対象になるのは絶滅に瀕している希な種や貴重な種のように、一般市民の生活とは縁が薄い生きもののような印象を与えられている。しかし、環境

保全や自然保護の正しい理解は身近な生きものの正しい知識を通してのみ得られることを周知させたかった。そこで、この講座では身近にみられる自然環境のうち、とくに“ありふれた”生きものたち（生物群集：植物、動物、微生物）の生活、それも個体のそれよりも生態系の中での個体群や生物群集としての生活を対象にして、天然の自然から人工的な環境にわたる生態系の構造と、その中で果たす機能を解説しようとした。

放送用のVTR撮影に際しては、対象が多様な生きものであるために撮影の時期や場所の制約を受けざるを得ない。しかし、計画後実際に撮影されるまでの時間が短かった、担当者（ディレクターなど）の人数が少なかった、また、担当講師の経験も少ない、などのために、十分に満足できる映像が得られたとは思えない。関係者の努力で、内容的には劣るとは思わないが、NHKの「自然のアルバム」や「生きもの地球紀行」に比較すると、技術的な面では各段の差を感じる。投入された人力・資金・時間を見れば、当然の結果であろうが、視聴者はその斟酌をしないで評価するだろう。予算の関係もあろうが、制作にもっと余裕が欲しかった。

自然な環境での映像が豊富に収録されているので、ビデオに録画された放送内容は大学での講義の教材として一般教育のレベルだけでなく専門課程でも大いに活用できると思われる。とくに自然環境に関する生物学や生態学の分野では、生きものの生活はきわめて多様であるため、各教官がそれぞれ教材を収集できる対象生物やそれらの生息地域には限りがあるから、この放送録画の利用は講義の内容を豊富にするなど、きわめて効果的であろう。

1回目のスクーリングでは視聴前で、しかもテキストが配布された直後であったためか、質問内容は講座の内容とはずれたものが多かった。2、3回目は大体講座の内容に絞られた。スクーリングでの活発な質疑を通して得られた印象では、生きものに関してかなり広域からの視点もつようになるという点で、かなりの受講効果があったと思う。

講座を担当した感想から公開講座実施上の問題点と今後の課題等について述べると、

- ① 私がこれまでに関係した他の公開講座でも同様だが、対象とする受講者層は、社会で活躍中の人たちは少なく、年寄と閑人が多いように思えた。
- ② 講座の周知方法についてみると、公開講座案内の情報入手は、ダイレクトメール的な新聞、広報、パンフレットが多かった。放送公開講座でありながら、テレビやラジオでの情報伝達の少ないことに疑問を感じた。テキストの印刷配布数が300に満たないが、これまでの他の講座をみても大同小異であるから、これは講座の内容の問題というよりも公開講座の宣伝方法に問題がありそうだ。
- ③ 放送公開講座の視聴率についてみると、講座は土曜日の早朝05：45に放映されている。ビデオがあるとはいえ、視聴しにくい時間帯である。RCCの電波がカバーできる地域はほぼ広島県内に限られている。映像は再放送されることがない。放映後はビデオが放送センターや広島大学の図書館などの限られたところに納められ、再利用されることは少ない。

このように、テレビの制作にかけられた労力に比べて視聴効率が悪いように思われる。放送録画ビデオが大学に限らず、市町村の公民館などで利用されやすいような方策を考えるべきだろう。

(ラジオ科目) あえて「育む」—今、子どもの教育に求められていること—

主任講師：教育学部教授 今泉 信人

18回にわたる放送を終えた今、ほんと安堵感にひたっているのが偽らざる心境であり、事後調査の分析を終えていない現段階では客観的で正確な所見をご報告することができない点をまずお詫びする。とは言え、番組の企画から放送の終了に至るまでの間に、番組のお世話をさせていただいた者としていくつかの点を感じたり考えたりした。主観的であるかもしれないことをお許しいただいて、これらの点を主任講師の所見として報告する。

1. 科目の主題『あえて「育む」』に対する学習者の反応

近年子どもたちの世界に深刻な問題行動が多発してきたのは、日常の生活状況における教育力の低下のために、子どもたちの心に本来育つはずのものが育ちえていないからである。この前提に立つと、私たちは子どもたちに対して「あえて育てる」ということをしてやらなければならない。この場合に求められる教育的営みは、大人主導型の「育てる」という営みではなく、子どもの内在的成長への力に信頼をおいてじっくりと時間をかけて進める「育む」という営みである。こう考えて、科目の主題を「あえて育む」とした次第である。

学習者がこの意図をどれだけ理解してくれたかは、アンケートの分析を待たなければ正確なところはわからない。しかし、スクーリングの様子からすると、第1回から第3回と回が進むにつれて、「育む」の意味と重要性について学習者の理解が得られてきたように思う。

2. 担当講師

担当講師は教育学（教育社会学）1名、心理学6名、学外の実践家4名の計10名で、いずれも私がふだん親しくさせていただいている先輩、同僚、友人である。その意味で考え方の近い講師陣であったことにある種の狭さを感じはする。しかし、講座の主旨をよく理解してくれ、連携もうまくとれ、制作が順調に進んだ点は心強かった。特に学外講師陣には、ご自身の優れた実践の中の「育む」という営みがもりこまれたお話をさせていただいた点に大いに感謝している。

3. 放送局（中国放送）との連携

制作担当者の田島氏は長年公開講座を手がけてこられたベテランであるので、番組制作に関しては全面的に同氏にお任せした。同氏はテキストを熟読され、要点を抜き出し、それを中心にして放送内容を構成してくださった。私は同氏に大いに感謝している。

4. スクーリングの持ち方

3回のスクーリングは、全体構成の説明、補足説明、質疑応答などで進め、全体として極めて活発であった。学習者の中には学習者どうしの間での討論を求めている人がかなりいたが、時間の都合でこれに答えてあげることができなかった。スクーリングの持ち方にひと工夫が必要である。

5. 番組の時間、回数、期間の問題

アンケートの調査結果を分析してみないと正確なところは言えないが、1回30分、18回（土・日曜日で2ヶ月間放送）のスケジュールは、番組に対する注意の集中度と持続度からは適切と思えたが、講座テーマの一貫性を保持することに難しさを感じた。

広島大学

以上、反省するところが数多いが、またアンケートの結果で愕然とすることになるかもしれないが、スクーリングなどの印象からして、主観的な所見ではあるが、全体としてはおおむね成功しているのではないかと考えている。

Ⅱ. 制作報告（テレビ科目）

（1）制作責任者報告

中国放送報道制作局テレビ制作部部長待遇 田中 義夫

1. 番組制作の基本方針と大学その他の関係機関との協力関係について

私達を取り巻く自然の中にはさまざまな生きものが存在しています。この生きものたちと私達の間を眺めてみると、人間の生活はすべてこの生きもの達の恩恵によって成り立っています。今回の講座では、微生物からブナの大木まで私達の身の回りに存在する生きものたちがその生態系の中で果たしている機能を学び、そして自然保護から自然管理まで考えると共に、身近に見られる生きものたちとどのように付き合えばよいか、また、お互いに共存する方法はどのようにすれば可能になるのか、このあたりを探って見ることにした。

今回の講座は広島大学総合科学部の担当でしたが、講師の先生方の連携が大変に良くて番組制作がスムーズに進みました。また日本道路公団、東海大学、有機農業団体、県内の各市町村からも講師の諸先生方の仲介により十分にご協力を頂くことができました。

2. 番組の企画、構成及び制作上の工夫、特色等について

「生きものとの付き合い」のタイトルが示すように生きものたちの映像を紹介するために、出来るだけ外に出て撮影することをこころがけました。マングローブの撮影では沖縄の西表島、極地の植物では富士山、そして道路の表土保全は日光宇都宮道路まで出掛けました。しかし、季節的な問題や天候の関係、また時間的な制約などもあって十分にできなかったことが残念です。

番組の構成上では30秒のオープニングに取材テープをながし文字スーパーで番組内容を簡単に紹介。また、本編に入っても講師紹介に続いて講師の先生から改めて当日の内容をかいつまって話してもらうなど事前準備をして本論に入ることにしました。

制作上ではアナウンサーも内容を理解して話を進めてもらうために、講師の先生との打ち合わせの時間を出来るだけとるようにしました。とくに録画日の前日または前々日には十分に時間をとって言葉（専門用語）について話し合ったり、フリップなどの説明方法なども検討しました。また「生きもの」の映像が長時間続く場合は音楽だけを流し気分転換の場としたこともあります。そして画面に出る「生きもの」にはその名前をスーパーにすることをこころがけました。

「生きもの」をスタジオに持ち込むこともありました。カブトムシ、クワガタムシの標本、マツノマダラカミキリの幼虫、ミズヒキソウ、イノコヅチ、南極のコケなど視聴者の興味を引く方法も試みました。

3. 番組の視聴状況と成果（評価、反応）について

放送時間が午前5時45分～6時30分の早朝番組とあって視聴率としては、いま一歩といった

ところで、13回の平均視聴率は1.7%でした。しかし月別に見てみますと10月度＝1.2%、11月度＝1.6%、12月度＝2.3%と次第に上昇しており、回を重ねるごとにこの番組に興味と関心を持つ視聴者が増えて来たことがうかがえます。

視聴者の年齢構成はビデオ・リサーチ調査のテレビ個人視聴状況報告書によると、10月17日の放送では50才以上が100%を占めており、ここにも早朝番組としての特徴が出ています。(個人調査は年2回のため他の放送日については不明)

視聴者の評価、反応についてはモニター報告から抜粋してみました。

- ◎実物の虫や草花の登場は大変おもしろかった。
- ◎森林の大規模な伐採と地球の温暖化や酸性雨の関係がよく理解できた。
- ◎名前は知っていても映像で見るのは初めてのものがいろいろ出てくるので、
- ◎興味を持ってみた。テレビの持つ視覚に訴える機能が十分に生かされていた。
- ◎映像の植物に名前がスーパーしてあるので日常の植物観察に役立った。
- ◎聞き手のアナウンサーが要点を理解し、心得て質問している。
- 図表の中にたくさんの文字が書き込まれているので解かりにくい。
- 数表はもっと簡単にして見易いように工夫してほしい。
- 調査資料で古いものが使用されていた。
- オープニング、エンディングの映像が広大の校門では芸がない。
- もっと沢山の映像を使用して欲しい。

4. 実施上の問題点と今後の課題等について

構成上の問題として教材量と時間枠の関係があります。番組に厚みをもたせるために、できるだけ沢山のVTRや図表、写真を使用したいところですが、定められた時間内にすべて使用しようとするればかえって上すべりで散漫なものになりがちです。準備の段階でさまざまな資料を作りながら、本番ではカットすることもありましたが、この質と量と時間の問題は十分に考える必要があります。

放送用語の問題としてはいつも話題になることですが、いわゆる「学術用語」と、「放送用語」の関係があります。講師の先生方にとってみれば普段の日常用語として専門用語を使用されているわけです。これを一般の視聴者に理解させるためにはどの程度にまでかみくだいて説明して頂くかが難しいところでした。また一語の説明のために多くの時間が必要になることもありました。これについては画面にこの言葉の文字をスーパーすることで対応しましたが、多少は効果があったのではないかと思います。

放送素材として使用する図表がともすればテキストに掲載されている図をそのまま使用される場合があります。細かい地図や数字、そして盛り沢山の文字、印刷物で見れば解かりやすいものも、テレビになると逆効果になることもあります。この点については十分な話し合いが必要で、場合によっては既存の番組を見ながらの検討も必要ではないかと思います。

実施局の問題としては制作者が一名であったために、講師の先生方と打ち合わせや取材のスケジュールに無理が生じご迷惑をおかけしたことを反省しています。

(2) 番組制作担当者の所見

制作担当者：中国放送報道制作局テレビ制作部部長待遇 田中 義夫

今回の講座は「生きものとの付き合い」でしたが、生きものと付き合うのはなかなか大変なことでした。時間、天候、温度、場所、季節、・・・さまざまな条件がからんできます。ウンカをさがしての水田めぐり、取材途中での大雨、松の葉を食べてくれないマツカレハ。取材には予想以上の時間が掛りました。また、その時期でなければ撮影できないものもあり、こうした番組では最低一年以上の取材期間が必要であることを痛感しました。

今回の番組制作にあたっては、担当者が一人であったために十一人の講師の先生方との連絡がとりにくいこともありました。また、取材、打ち合わせなどのスケジュールが重複することもあり十分な対応ができなかったことが残念です。今後は担当の複数制をとることが必要です。

番組を担当して感じたことの一つに番組の知名度がありました。過去十数年にわたって放送されている番組ですからもっと知られているかと思っていましたが、一般の人達には意外に知られていませんでした。放送期間、放送時間等の問題もあるかと思いますが事前のPRが不足していた事を反省しています。今後は、番組の知名度向上のためにはもっと幅広いPR活動が必要であると共に、放送素材の利用・活用（公共機関等への外部貸出し）の方法なども考えられると思います。

制作報告（ラジオ科目）

(1) 制作責任者報告

中国放送ラジオ局制作部専任部長 田島 明朗

1. 番組制作の基本方針と大学その他の関係機関との協力関係について

30分番組の3年目を迎え、大学の事務当局、講師陣も45分講座から移行した時期に比べ、相応に『慣れ』を感じる。即ち、テキスト制作に当って、多少の物足りなさを押えても短縮が計られて来た。講座の担当学部、主任講師、各回担当の講師、各回の内容まで『放送実施専門委員会』で決定されるのが広島大学の通例であるが、本年度もこれが踏襲され、大学が決定した講師と制作担当者がテキストから台本に移行する段階から初めて交渉を持つ手順も非常にスムーズである。

また、当講座制作に当って重要な連絡役を勤める学生部教務係との関係も良く、スクーリング実施に至る迄非常に友好的に作業を進め得た。学外講師4名との調整作業を抱えながら成功した講座と言えよう。

2. 番組企画、構成及び制作上の工夫、特色等について

プロデューサー・アナウンサーを昨年に続いて今年も試みた。これは主として正味27分に限られる30分講座に対応するためである。

30分講座では、講師の話そのものさえ割愛しなければならない場合が生じる。30分講師の制作に当っては、極力無駄な相槌等を省く事に徹底すべきである。即ち、進行役は講師の話が無駄なく導き出し、それを次の話に誘導する役目に徹底する必要がある。そのためには制作担当者が直接インタビュアーとなるのが一番ロスの無い方法と確信し、昨年から実施しているシステムである。今年度の講師陣も、この主旨をよく理解され、収録、編集に当って全面的な協力を受けた。

30分のどの大学公開講座よりも多くの時間を講師の話したい事に割り得たと思う。

3. 番組の視聴状況と成果（評価、反応）について

☆番組の聴取率は個人全体で、土日曜日共0.1%と高くはなかった。

12月5日（土） 第11回『寂しさ・つらさへの耐性』

12月6日（日） 第12回『家庭学習の習慣化』を放送

☆『モニターレポート』に見る反応

- 1 育てると育くむの違いの説明から始まったこの講座は、同じ子育てをしている私にはとても興味深いものでした。子どもを育てていく上でどうしたらよいかを講師はちゃんと答えて下さっていて新鮮でした。（32歳主婦）
- 2 ラジオの公開講座というと『内容が難しいのだろう』『拘束される』などの先入観があって敬遠しがちだが、実際に聞いてみるとむしろ楽しめる講座でした。身近に利用出来るお話が多く、為になる内容でした。（33歳主婦）
- 3 他者との親密な関係を幼い頃に体験することの大切さがよく分かった。（30歳主婦）
等々、理論ではなく実践面の色彩が濃かった本年度の講座に対する理解度は高く、相応に『聞いて役に立つ』講座であったと判断出来る。

4. 実施上の問題点と今後の課題等について

本年度の担当学部が『教育学部』であり、主任講師は『発達心理学』専攻、その他『臨床心理学』『幼児保健学』『社会心理学』『学習心理学』『教育社会学』専攻の講師であり、部外講師として『ナレーター』『画家』『プロ野球選手』等を混えた今回の講座は、統一されたテーマの維持に困難さを感じたが、各回読み切りの講座と考えれば『子供の教育』についての関心は聴取層に高く、またスクーリングでも子育てに関する質問は核心をついたものが多かった。

反面、大学公開講座としてのレベル維持、格調の保持という視点からは今後に残す講座であった。

(2) 番組制作担当者の所見

制作担当者：中国放送ラジオ局放送制作センター専門部長 田島 明朗

『放送利用による大学公開講座』は、あくまでも大学に主導権があり、放送局は番組制作面で協力する建前から成り立っている

担当講師の選任、テーマ、毎回の講座内容等も広島の場合『大学』が一方的に決定する。

決定された講師、出来上がった講座を、いかに放送番組にするかが局の裁量であり、また放送専門家でない講師陣の期待するところである。

この方法による講座の制作、放送が広島の場合、17年間続けられ、ラジオ・テレビ合せて42講座を実施した。

しかし、ラジオ30分講座の3年目を終了して、今年大学に対して18回の講座を二分割する事を提案した。

18回1講座は、30分講座が始まって派生した回数である。

18回1講座が開始されてから、毎年の主任講師が苦勞されるのがテーマの一貫性保持の困難さである。

事実、13回に比べて18回の講座に通しのテーマを維持させることは困難さを増した。

また聴取者、受講生からは『18回を聞き落とさないようにする事の難しさ』が指摘される。

大学に提案した2分割とは次の様な内容である。

講座自体は一つの通しのテーマで良い、それを例えば第1部、第2部。または『理論編』『実践編』に分け、各々9回の講座に内容の一貫性を持たせることである。

この方法ならば、例えば副主任講師を設ける程度のことで『聞きやすい』『組立てやすい』講座になり、スクーリング等を担当する学生部の負担には変化はない。

制作に当る放送局側も、2講座に分割されれば制作担当者の各講座張り付けが可能になり、一貫性を保ちやすい。18回の講座を1名のディレクターで担当する事は相当にハードである。

45分講座か30分講座かの議論が過ぎた現在、新しく浮かび上って来た18回の講座組立に対する一つの提言である。

Ⅲ. 講座の概要

◎ 科目の概要

科目名	中心的なテーマ	科目のねらい	内容・方法	放送曜日・時間・期間
生きものとの付き合い (テレビ)	環境の時代といわれるようになった。われわれの身近な環境として存在する生物群集の、自然界での役割を学び、それとの付き合い方を考え、自然環境のより良い保全策を探る。	身近にみられる自然環境のうち、とくに生きもの(生物群集:植物、動物、微生物)を中心に、天然の自然から人工的な環境にわたる生態系の構造と、その中で生物群集が果たす機能を解説する。その知識に基づいて自然保護から自然管理まで、これまでのわれわれとの付き合いの結果生じた自然または人為的景観と、これからどのように付き合っていくべきかを探る。	総合科学部自然環境研究講座の教官を主に、各専門分野について、1～2回を分担していただく。講義を中心に、各講師の研究資料を材料にし、また研究の場の映像を利用して理解を助ける。	平成4年 10月3日～ 12月26日 毎週土曜日 5:45～ 6:30 (13回放送)
あえて「育む」ー今、子どもの教育に求められていることー (ラジオ)	ここ10数年間、子どもたちの世界には、特に中学生を中心として、深刻な問題行動が多発し過ぎた。その背景は複雑であるが、小学生までの間に、子どもたちの心に育つべきものが育っていないということがその一因になっていると言える。 そこで、本講座においては、今日の子どもの人格形成上の問題点を反省して、彼らにあえて育むべきものとその育み方を探る。	近年、子どもたちの生活環境は豊かで便利にはなったが、一方では教育力を失った。生活様式が変われば、それにふさわしい教育的営みが再考されるべきであるのに、現実にはこれがなされていない。 本講座においては、今日の日常生活における教育力の低下を指摘して、今日の子どもにあえて育むべきものとその育み方について考えさせる。	まず、青年の今日的な問題行動から、今日の子どもの人格形成上の問題点を反省する。 これを受けて、今日の子どもにあえて育むべきものとその育み方について提案する。さらに、プロの世界などですぐれた資質を開花させた実践例によって、あえて育むべきことへの理解を深めたい。 講師はいずれも各分野の研究者と実践家であり、できるだけ実例を上げ、平易に解説する。	平成4年 10月31日～ 12月27日 毎週土曜日・日曜日 20:30～ 21:00 (18回放送)

◎ 科目の構成

(テレビ科目) 生きものとの付き合い

放送回 (月日)	中心テーマ	内 容	担 当 講 師
第 1 回 10月 3 日 (土)	はじめに： 生態系の構造と 生きものの生活	植物、動物、微生物などの生きものたちは、生物群集というまとまりを作って、相互に依存し合いながら生活し、食物連鎖を通して物質を生態系の中に循環させている。ここでは、その相互関係とシステム構造を概説する。	総合科学部教授 高 橋 史 樹
第 2 回 10月10日 (土)	人が作り出す景観 と植物： 草原と里山の植 物	人はその生活のために自然に働きかけた。過去の、或は今の景観の主要要素は植物によって構成されており、その多くが人間によって創生されたものである。草原と里山に人為的に生存が確保されてきた植物を訪ねよう。	総合科学部助教授 中 越 信 和
第 3 回 10月17日 (土)	都市の植物： 身近な植物たち の世界	自然の森林や草原でなくても、私たちの居住空間のまわりには、いたるところにさまざまな植物が生育し、自然破壊の傷口を緑の衣で癒すかのように雑草が侵入してくる。都市での人と雑草たちとのかかわりを考えよう。	総合科学部教授 根 平 邦 人
第 4 回 10月24日 (土)	森林の環境保全機 能	森林は環境の保全に計り知れない役割を果たしている。治水や治山などの地域や流域のレベルから、温暖化・乾燥化などの地球レベルまで、その役割を具体的に述べ、森林を衰退させる酸性雨などについても触れる。	総合科学部助教授 中 根 周 歩
第 5 回 10月31日 (土)	森林における昆虫 の役割	森林には多くの昆虫がいて、生きた葉を食べたり、死んだ木の材を食べて生活している。彼らは森林にとって何の役にも立っていないのだろうか。毛虫やカミキリムシ、さらには、松枯れなどを通して考えてみる。	総合科学部助教授 富 樫 一 巳
第 6 回 11月 7 日 (土)	田畑の生物群集： ただの虫とのつ きあい	田畑は作物を育てるところだが、そこでは、雑草、害虫、病原菌などの邪魔者以外にも、作物とは無関係と思えるようないろいろな「ただの生きもの」が沢山生活している。害虫の増減での「ただの虫」の役割を考えよう。	総合科学部教授 高 橋 史 樹 愛媛大学農学部助手 日 鷹 一 雅
第 7 回 11月14日 (土)	土と微生物： 目に見えぬい きものとのつきあ い	われわれの身の周りの土壌中には、膨大な数と量の微生物が存在する。それらの微生物の、分解者としての働きや、植物との相互作用（根圏の微生物、菌根としての生活など）について解説する。	総合科学部教授 堀 越 孝 雄

第 8 回 11月21日 (土)	池や沼の生きもの： 顕微鏡の世界を 中心に	まず、池や沼の特徴について眺め、プランクトンを中心とする顕微鏡的な生物の生活様式や食物連鎖について触れる。ついで、これらの生物を顕微鏡で観察したときのようなすを実際の動きのなかで捉えて説明する。	総合科学部教授 重 中 義 信
第 9 回 11月28日 (土)	汚水の中の生物： 汚水の浄化にお ける微生物の役 割	人間は多くの微生物に囲まれて生活している。人間が生物的・社会的活動の結果、毎日多量に放出する汚水の多くは、微生物の力をかりて浄化される。汚水を浄化する現場に立ち入り、微生物たちの浄化活動を解説する。	総合科学部講師 設 楽 惣 助
第 10 回 12月 5 日 (土)	極限の自然環境中 の生きもの： 高山・極地の植 物の生活	高山の厳しい環境の中で、植物はどのようにして生活しているのだろうか？ コケを含む高山の植物の特徴とそれらの生活を紹介し、酷寒の極地に生きる植物の生活とそれらの関係についても解説する。	総合科学部助手 中 坪 孝 之
第 11 回 12月12日 (土)	緑の復元： マングローブ林	マングローブは、熱帯・亜熱帯の海岸に成育する樹木である。最近、地域開発のために多量に伐採されているが、その林の復元は極めて困難で、植林・伐採方法の改善が必要である。珍しい成育状況もあわせて紹介する。	総合科学部教授 倉 石 晉
第 12 回 12月19日 (土)	道路の緑地保全： 表土と生物群集	道路の建設工事のあと、できるだけ早く、しかも、周囲の自然環境に影響の少ない形で緑化を進め、また、その緑を維持するにはどうしたら良いかを考える。また、表土を保存し、それを復元する工法の効果を考える。	総合科学部教授 高 橋 史 樹 総合科学部助教授 中 越 信 和
第 13 回 12月26日 (土)	身近な自然保護	自然保護とは人が手を触れなければ良いということではない。人が手を加えると滅びてゆく生きものもあるが、人が手を加えることでやっと生活できるものもある。そのような生きものと人とのつきあい方を考えてみる。	総合科学部助教授 中 越 信 和 総合科学部教授 高 橋 史 樹

(ラジオ科目) あえて「育む」ー今、子どもの教育に求められていることー

放 送 回 (月日)	中心テーマ	内 容	担 当 講 師
第 1 回 10月31日 (土)	I. 問題提起 いま、なぜ「あえて育む」なのか	近年、思春期の子どもを中心として、深刻な問題行動が多発し過ぎた。小学生までの間に育つべきものが育っていれば、これは妨げたかもしれない。「あえて育む」ことの必要性を強調して、本講座の主旨を説明する。	教育学部教授 今 泉 信 人

第 2 回 11月 1 日 (土)	Ⅱ. 子供の成長の 反省 現代青年の大人に なることへの戸惑 い	青年期がモラトリアム時代と言われて既に 久しく、大人への成長に戸惑っている青年が 少なくない。青年の心理相談の経験から、現 代青年のこの戸惑いを語り、子ども時代の教 育のあり方を反省する。	保健管理センター 助教授 児 玉 憲 一
第 3 回 11月 7 日 (土)	不登校の子どもた ち	近年、不登校の子どもが激増している。そ の実態はどうなっているのか。なぜ、登校を 拒否するのか。人格形成の上でいったい何が 起こっているのか。不登校の問題を手がかり にして、今日の子どもについて考える。	教育学部教授 鐘 幹八郎
第 4 回 11月 8 日 (土)	遊び型非行に走る 子どもたち	豊かな今日、なぜ非行が多発し、低年齢化 しているのか。非行の大半は遊びの動機によ る遊び型非行である。その実態とメカニズム を述べ、今日の子どもの成長の問題点を反省 する。	教育学部助教授 南 博 文
第 5 回 11月14日 (土)	校内暴力といじめ	昭和50年代後半に全国各地で荒れ狂った校 内暴力といじめは現在もなおくすぶっている。 なぜいとも容易に暴力に走るのか。その実態 とメカニズムを考え、子どもの人格形成上の 問題点を反省する。	教育学部教授 今 泉 信 人
第 6 回 11月15日 (日)	Ⅲ. あえて育むも の 自主的な生活力	自主的自律的生活能力や自己管理能力に危 惧を感じる子どもは少なくない。子どもの生 活のどこに問題があるのだろうか。この問題 を反省して、幼児期・児童期にあえて育むべ きものとその育み方について考える。	教育学部教授 清 水 凡 生
第 7 回 11月21日 (土)	社会生活のけじめ	善悪や自他のけじめ、義務や責任の遂行、 規律ある行動など、社会生活のけじめをつけ る力が乏しいこと、思春期以後の社会的自立 はおぼつかない。素直で真面目な小学生期に この力をしつけることの大切さについて述べ る。	教育学部教授 吉 森 護
第 8 回 11月22日 (日)	子どもどうしの輪 作り	現代っ子は人間関係が縮小・稀薄化して、 人間関係を営む力が極めて弱い。本来なら誰 とでもくっつくなくつき合えるはずの子ども たちがなぜこうなったのか。子どもどうしの 輪作りについて考える。	教育学部助教授 南 博 文

第 9 回 11月28日 (土)	本物の思いやり	いじめの多発に代表されるように、近年思いやりの欠如が目立ち過ぎた。思いやりは単なる同情ではない。本物の思いやりとは何か、その成長の道筋はどうなっているのか。思いやりの育み方について述べる。	教育学部教授 今 泉 信 人
第 10 回 11月29日 (日)	親、教師等目上の人との絆	親や教師との間に好意・信頼・尊敬の絆がなければ、子どもは糸の切れた風も同然で、親や教師の教育力は半減する。親や教師を頼りにする小学生期こそ、この絆を育む時期である。その育み方について考える。	教育学部教授 吉 森 護
第 11 回 12月 5 日 (土)	寂しさ・つらさへの耐性	青年期の一人立ちの旅は順風満帆とは限らず、いくつもの寂しさ・つらさに出会う。順調路線だけを歩いていると、その度にくじけるかもしれない。寂しさ・つらさへの耐性と自分を舵取りする力の育み方について考える。	教育学部教授 今 泉 信 人
第 12 回 12月 6 日 (日)	家庭学習の習慣化	学校や学習塾での勉強は当然のこと。自由な家庭の中で習慣化した勉強こそ本物の勉強である。小学生期は家庭学習の習慣化にとって重要な時期である。その育み方について述べる。	教育学部助教授 森 敏 昭
第 13 回 12月12日 (土)	感性を育む	知識偏重のツメコミ教育は子どもたちからみずみずしい感性を剥ぎ取った。現代っ子の心性の歪みの一面である。子どもたちに真に豊かな感性を取り戻させるには、家庭、学校、社会は何をしてやればよいのかを考える。	教育学部教授 片 岡 徳 雄
第 14 回 12月13日 (日)	Ⅳ. 実践 価値あるものへの目覚め	価値あるものに対して本格的に目覚めるのは青年期であるが、それ以前にそのための土台作りをしておかなければならない。幼児、児童期における文学と朗読によるこの土台作りの進め方について述べる。	音声文化研究会理事 ヒロキナレーション アカデミー 田 中 弘 毅
第 15 回 12月19日 (土)	絵画表現の喜び	絵画は心の表現。子どもの絵画には、子ども本来のみずみずしい喜びが表現されていてほしい。今、子どもの絵画はどうなっているだろうか。絵画と子どもの心の関係を語り、絵画表現の喜びの育み方について考える。	画家 西 谷 勝 輝
第 16 回 12月20日 (日)	私の生徒指導論 ー広島野球の礎ー	甲子園最多の優勝を誇る広島野球。その伝統の礎の秘密は野球を通じての広島教育の構築の中にある。広島野球の礎作りについて語り、そこから今日の子どもの教育のあり方について考える。	広島県高野連顧問 広島会計学院専門学 校校長 前広島商業高等学校 長 島 山 圭 司

第 17 回 12月26日 (土)	私のコーチ学 ープロ野球選手の 一流への道ー	プロ野球の一流選手はどのようにして育つのか。素質と努力以外にも、彼らを一流へと導いた何かがあるに違いない。一流への成長の道程とその条件について語り、子どもの教育への示唆について考える。	広島東洋カープ前監督 阿 南 準 郎
第 18 回 12月27日 (日)	V. 教育への提言 日本の教育の進路 を問う	日本の子どもの成長を根本的に決めているのは、日本の教育そのものである。これを抜きにしては、日本の子どもの姿は語れない。日本の教育の伝統と特徴を反省し、その進路を問い、本講座全体のまとめとする。	前広島大学長 沖 原 豊

◎ 受講生の応募等

テレビ講座 179名

ラジオ講座 269名

◎ スクーリング

(テレビ科目) 生きものとの付き合い

	実 施 場 所	実 施 日 時	備 考
1 回	広島大学法学部・経済学部	平成4年9月27日(日) 10:00~12:00	講師数 4
	福山市中央公民館	〃 14:00~16:00	講師数 4
2 回	広島大学法学部・経済学部	平成4年11月15日(日) 10:00~12:00	講師数 4
3 回	広島大学法学部・経済学部	平成5年1月10日(日) 10:00~12:00	講師数 4
	福山市中央公民館	〃 14:00~16:00	講師数 4

(ラジオ科目) あえて「育む」ー今、子どもの教育に求められていることー

	実 施 場 所	実 施 日 時	備 考
1 回	広島大学法学部・経済学部	平成4年9月27日(日) 13:00~15:00	講師数 4
	福山市中央公民館	〃 10:00~12:00	講師数 4
2 回	広島大学法学部・経済学部	平成4年11月15日(日) 13:00~15:00	講師数 4
3 回	広島大学法学部・経済学部	平成5年1月10日(日) 13:00~15:00	講師数 4
	福山市中央公民館	〃 10:00~13:00	講師数 4

◎ 再視聴

(テレビ科目) 生きものの付き合い

実施場所	実施・日時	備考
広島大学附属図書館視聴覚室	平成4年10月12日(月)～ 平成4年12月25日(金) 9:00～11:30	土・日曜日、祝日を除く。 各回の放送終了後、随時視聴できるようにする。

(ラジオ科目) あえて「育む」ー今、子どもの教育に求められていることー

実施場所	実施・日時	備考
広島大学学生部教務課教務係	平成4年11月9日(月)～ 平成4年12月25日(金) 10:00～16:00	土・日曜日、祝日を除く。